【地域活動ノート】

スピーチコンテストをなぜ行うのか

――地域との繋がりを目指して――

大橋稔*

活動の概要

第９回中国語スピーチコンテスト（2023年10月28日）と第12回英語スピーチコンテスト（同11月23日）を開催した。いずれのコンテストも応募者多数であったため事前審査を行い、中国語スピーチコンテストでは21名（朗読の部10名、スピーチの部11名）が、英語スピーチコンテストでは20名（高校の部14名、大学の部６名）が日頃の語学学習の成果を披露した。両コンテストとも全国から応募があるが、特に英語の高校の部には、継続して応募してくれている県内の高等学校が複数ある。また連続して応募してくれる個人や、出場後に視聴者として来場したり、教師になって生徒を連れて来てくれたりする元出場者もいる。

キーワード：語学教育、英語、中国語、スピーチ

語学教育センターでは、語学教育の一環として英語スピーチコンテストと中国語スピーチコンテストを毎年開催している。創立45周年の記念事業として準備された本コンテストは、本年度で英語スピーチコンテストは12回目、中国語は９回目の開催となった。語学教育の一環として計画されたスピーチコンテストであるが、特に英語スピーチコンテストは近年、地域貢献的な意義も有するようになってきているので、近年のコンテストを回想しつつ、語学教育センターが行う地域活動報告として本稿を作成する。

両スピーチコンテストは通常、当該年度の振り返りを踏まえつつ、年度末に翌年度の実施内容について立案することから準備が始まる。21年度は新型コロナ感染症の影響を受け、オンラインでコンテストを開催したが、22年度は感染症の影響としてではなく、オンラインでのスピーチが新しい時代のスピーチの一つの主要な形態になり、その技能を高めることは今後も必要になるとの考えから、オンラインでコンテストを実施することにした。

このようなコンテストの開催意義を広く理解してもらうことを目的に、21年度の審査員長であった小堀隆司教授（英語）と樊穎准教授（中国語）と所長である大橋の三人で座談会を行い、その様子を収録した動画を語学教育センターのホームページ上で公開した。そこでは対面で行うスピーチとオンラインで行うスピーチとでは、聞き手との距離感の違い、話し手の見え方の違いなどから留意すべき点が異なることを説明した。開催方法を決定した意図などを広く伝えることは、ある種の知の地域への還元だと言えるだろう。

そして23年度も引き続きオンラインでコンテストを継続することに決めた。コロナ禍の収束に伴い教育現場には対面での活動が戻ってきた。特に語学教育においてはオンラインを使用する機会、意識が激減したように思われる。しかし現実の社会では、オンラインを使用することの利点は残り、オンラインでのやり取りは継続されている。そのような状況の中、オンラインでのスピーチ技術の向上に意識を向け続ける必要があるとの考えからの決定であった。

語学教育センターのスピーチコンテストは、コンテストであるためその技能の優劣を判断することは避け

＊　城西大学語学教育センター教授

られないが、それ以上に学習活動の一環であり、学習成果の確認の場であることを大切にしている。そのような場を（全国からの応募を受け付けているものの）県内の学生や高校生に提供できていることは、センターとしての地域活動であると考えても良いだろう。またこのような意識を今後も保ち、継続していく必要があると考えている。

英語スピーチコンテストは、近隣の高等学校に好意的に受け入れていただけているようで、コンテストに応募するための校内選考会を実施している高校もあると聞いている。第１回コンテストを計画したとき、どの程度の応募を得られるのか不安で、若林俊英副所長（当時）と二人で近隣の高校を訪問し、参加をお願いするとともに、本コンテストの存在を英語カリキュラムの一環に取り入れてほしいと依頼したことが懐かしい思い出である。

また中国語スピーチコンテストは、第二外国語であるため参加は大学生に限られているが、早い段階よりNPO埼玉県日本中国友好協会の協力を得ながら開催している。一方で、本学学生も協会が主催する催しに参加するなど、中国語を学ぶ学生と友好活動を推進する県内の人々を繋ぐ場としての役割を果たせている。コンテストに挑戦した本学学生の中には、卒業後も協会の催しなどに積極的に参加し、中国語のみならず中国への理解をさらに深め続けている方もいる。

本コンテストでは、参加者の交流にも力を入れている。発表者だけではなく視聴者も発表者にコメントを伝えることができる制度を整えたり、結果発表までの時間で互いの感想を述べあうなどの機会を確保したりしている。オンライン開催では、懇親会を行うことができなくなってしまったが、これらの取り組みは継続している。特にこの時間では、高校の先生方に生徒への「褒め」言葉を述べるよう促している。褒められることがさらなる学びの意欲に繋がるからだ。

またこのような場では、思うように力を発揮できなかったように思われる出場者に積極的に声がけをすることを、運営側として特に心掛けている。次の学びの意欲が途絶えないようにしたいと考えるからだ。すべてがダメだった発表者など居るわけもなく、必ず評価できるべき点がある。そのことを具体的に指摘することで、笑顔を見せてくれることも多い。登壇者一人ひとりの当日までの努力を、最大限に讃えることができるコンテストでありたいと考えている。

これらの取り組みについては、地元の高校の先生方から概ね好評をいただいている。「教育的配慮の行き届いたコンテストで、また生徒を出場させたい」などのお言葉をいただくことがある。また県内の他の大学がスピーチコンテストを企画したさい、「城西のようなコンテストを目指したら良い」と本コンテストの後援団体より助言があったとして相談を受けたこともある。これらは本コンテストをめぐるセンターの活動や姿勢が、地域に評価された結果だと思いたい。

本質的な意味においてスピーチコンテストの開催は、地域活動とは呼べないのかもしれない。しかし既述した通り、センターの取り組みは埼玉の関係者からの信頼によって成り立ち、関係者の活動にも何らかの影響を与えるものとして継続している。この点において、スピーチコンテストをめぐるセンターの活動を、地域への貢献活動だと呼んでも良いだろうと思う。これからも地域との繋がりを大切にしながら、スピーチコンテストという教育活動、地域活動を継続していきたい。